

## ■蜜族PC①「ドレイクの姫君を守る者」個別設定

きみはまだ幼さの残るドレイクの姫君、エリントーナ・シェフティ（ドレイク／女／14歳）を守る使命を帯びていた。

きみにはいささか理解しがたいことだったが、エリントーナは人族に対して寛容であり、困っている者がいれば手助けしようとする、「バルバロス（蜜族）らしからぬ」人物だった。

だがきみは、そんなエリントーナの不思議な為人ひととなりに興味を抱いていた。彼女のやりようを見届け、どんな結末が訪れるのか、知りたくなったのだ。それに彼らが逗留する城塞都市バルザークには、魔神が毎日のように襲ってくる。戦う相手がいるなら、不満はなかった。

だがそんなある日、エリントーナが姿を消した。

**推奨技能：**戦士系＋任意

**推奨キャラクター：**

ドーンの暗殺者（⇒『BR』41頁）

or ドレイクブロークンの神官戦士（⇒7頁）

.....(山折り).....

## ●きみの疑問

エリントーナがどこへ行ったのか、目撃したバルバロス（蜜族）はいない。ボルグどもは「人族が殺した」「拉致した」と疑っている。

だが、エリントーナがいなくなれば、ボルグどもは早晚、統制を失って人族を襲いだすだろう。そんな愚を、人族が犯すだろうか。

そして奇妙なことに、昨夜を最後にエリントーナが姿を消してから、魔神が襲撃してこない。いままで、1日と休むことがなかったというのに。

人族がどうなろうと、別に知ったことではない。しかしエリントーナにもしもの事があれば、果たして自分は自分を許せるだろうか。

最後に会話を交わし、きみが部屋を辞するとき、エリントーナは虚ろな瞳で中空を眺め、聞こえないほど小さな声で「〈奈落の核〉の元に行け……？ わたしに、押さえ込める？ それとも……」と口にしていた。

〈奈落の核〉を見つければ、彼女はいるのかもしれない。

**目的：**エリントーナを救う。